補　　　足

本誌前號に「南方諸地域に於ける脚鬚目概說」と題する拙稿を掲げたが、書き出しを次のやうにすべく原稿を用意したのにうつかりして此の部分の掲出を忘れてしまつたので妙な次第であるが此處に掲げる。

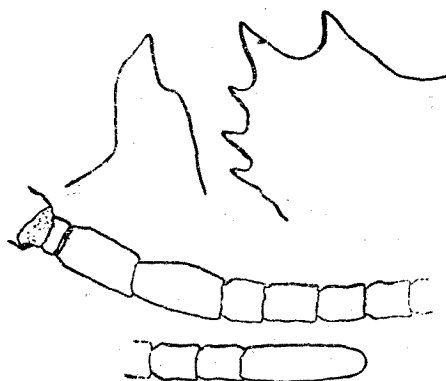
南方諸地域に於ける脚鬚目概說

高　島　春　雄　Haruo Takashima

東京文理科大學動物學教室

内　　　容

本稿は同じ著者の「南方諸地域に於ける蠍概說」と姉妹篇を成すもので去る昭和19年1月脫稿した。爾來今日まで上梓の機を得られなかつたが其の間に戰火は本稿の最後の章V參考文獻を亡失せしめた。脚鬚目は節足動物門蛛形綱中にクモ・メクラグモ・サソリ等と對等の位置を占める1目であるが本稿は今後曾ての“南方圏“を支配し或は其處に動物學的踏査を行ふ人々にとり多少お役に立つかと思ふ。先づ脚鬚目の標徵、分類體系を記し屬までの檢索表を掲げて同好諸氏の便に供し、次に南方諸地域に見る代表的の種類を擧げたが日本產、中國產のものには稍々詳しく觸れた。臺灣の紅頭嶼は動物地理學上特異の地位を占めるが鹿野博士の採集品に基き同島產サソリ、サソリモドキに關し略報した。本稿を成すまでに多くの同學の方々の御援助を蒙つて居る。顧みて深き感謝を捧げたいと思ふ。特に此の類にも多くの關心を持ち研究された故廣島文理科大學教授佐藤井岐雄博士の不幸な御最期を偲ひ御冥福を祈ること切なるものがある。

それから動物學雜誌第56卷第9・10號（昭和20年10月）に私は「ブーゲンビル島產脚鬚目」（東亞產全蠍類脚鬚類の調查（其の十二)」といふのを掲げた。中に入れるカット2箇を用意したのであるが、其の後同誌ではカットを全然掲出しない方針になつたので割愛した。其の內一つは本誌中に使用したから（第107頁第6圖）第2圖のみを此處に掲ける。

パプアモンナシサソリモドキ♀上右は右觸鬚轉節の緣棘を示す。上左は右觸鬚顎葉の前上部の突出。下面觀。下は左第1步脚の鞭狀跗節の下面觀。各圖何れも毛を略す。×25〔原圖〕

§ 海南島產全蠍類追記　第三

辻忠二郎氏の御厚意により1944年4月15日華南海南島產サソリ標本1瓶を拜借調查する機會を持つた。それは氏の身寄りの御方が同島で採集したものであるといふ。フォルマリン漬になつてゐて種類は何れもヒノモトサソリであり測定其の他は次表の如くである（單位粍)。

	性	體長	背甲長	背甲幅	前腹長	後腹長	觸鬚長	櫛狀器齒數
1	♀	42.5	5	5.5	14	23.5	18	右19左19
2	♀	41	5	6	12	24	17.5	19　20
3	♀	34	4	5	11	19	14	19　19

同年9月4日土居寬暢氏の御好意で同島產サソリ3頭を入手した。其等はやはりヒノモトサソリで1♂ 2♀♀と考へられる。櫛狀器齒數は♂右20枚左19枚、♀右

20枚左20枚、右20枚左21枚であつた。

---

8 「八重山産全蠍目及脚鬚目」追記　第二

昭和18年12月3日鹿野忠雄博士の御厚意により氏が琉球、臺灣等で採集した標品3瓶を受領することが出來た。内容は臺灣本島産サソリモドキ（成體♂♀各1頭、ラベルには27X.1925とある）、琉球石垣島産サソリモドキ及びマダラサソリ、比律賓ミンダナオ島産カニムシモドキ等である。石垣島のサソリモドキは老熟した立派な♀で體長40.5粍（以下單位粍）、尾狀附屬物は約15、第1步脚蹠節に於ける黑染と缺刻は左右共第8及び第9節にはつきり現れてゐる。

マダラサソリは1♂2♀♀で其の内1♂は完全な標品である。櫛狀器齒數は左右共17枚。1頭は破損し亡失した體部も多いが♂である。齒數は右20枚左19枚で之は寧ろ珍しい方である。殘りの1頭も傷んでゐるが♀で齒數は左右共18枚。予がマダラサソリに就き齒數を算へたのは20例位に過ぎぬが其の限りでは齒數による性差は無いと考へられる。

前　號　正　誤

頁	行	誤	正
10	− 4	「アトビサリ」	「アトビサリ
12	− 3	Feaolloidea	Feaelloidea
13	+ 9	Bcier	Beier
〃	−10	Neoisiides	Neobisiides
17	+12	第1步脚鬚節	第4步脚跗節
〃	+14	〃	〃
20	+12	定めた	定めた。
24	+ 1	(? Ja-	(?), Ja-
43	+ 1	特　微	特　徵
44	+ 4	ロムポツク	ロムボツク
50	+13	Tarantulinae も	Tarantulinaeのも